

第1章「共生・対流」社会実験 IN 海士

この「共生・対流」社会実験事業を活用し、特色ある滞在型モデルの確立「島まるごと人間力向上プログラム～共創・共生社会に向けて～」を目指す。海士町のモノづくりを原点にしながら、主に「AMA ワゴン」では、外部の若者と地域の子ども達や住民の交流、新宿日本語学校「サマースクール in 海士」での国際交流、これまで実績がある「隠岐吟行ツアー」の文化交流を加え実施する。都市と海士町の交流を通じて、「海士ファン」を増やし、海士町の魅力を島外に発信するとともに、郷土の資源・魅力を再発見し、海士町の活性化・地域づくりに繋げる。それらが、相互の人間力を向上させる取り組みであり、WIN-WIN 関係価値の実証に寄与していきたいところである。

図 1-1 社会実験・実施活動想定

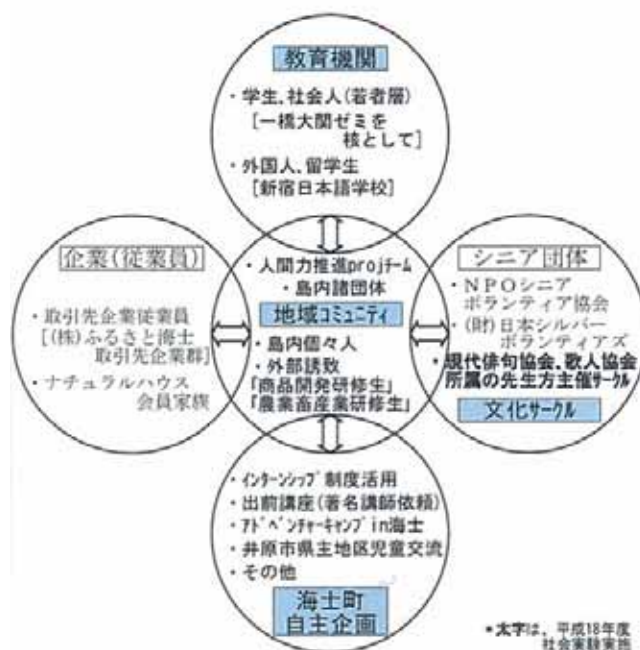
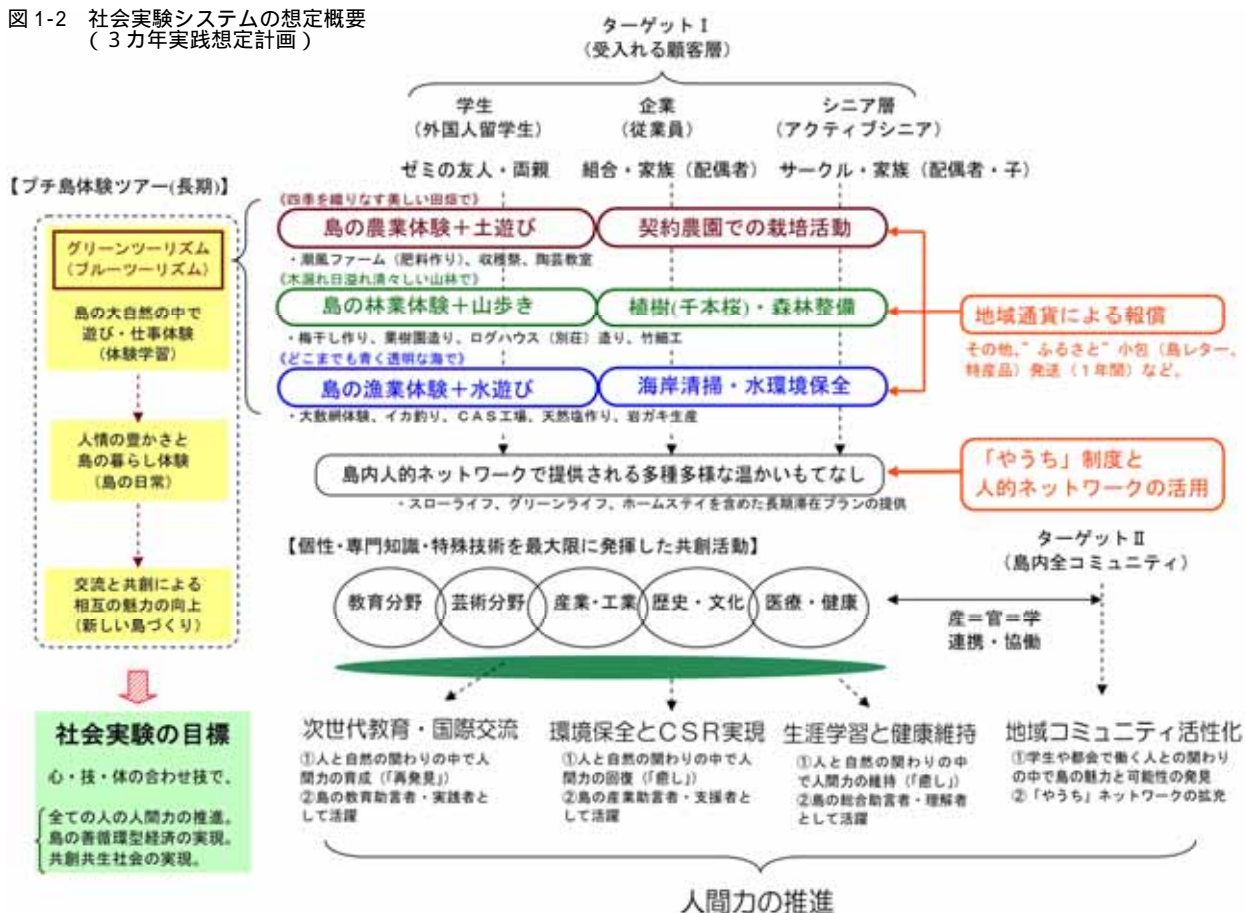


図 1-2 社会実験システムの想定概要 (3 年実践想定計画)



1. AMA ワゴン・出前授業のスタート（国立市への逆ワゴン含む）

平成 17 年、国立市民・一橋大に海士中学校修学旅行が受け入れられる。その縁から、海士町の主要な取組課題の一つ「教育」を絡め、小・中・高校生の学力と心を育てる、同時に都市と離島との交流及び、一橋大学・国立市との連携を深める試みとしての AMA ワゴン・出前授業のスタートである。

年 5 回+ の出前授業開催/超一流講師を海士町へ/都市から学生専用バスの運行

20～30 歳代の最先端で活躍する人を講師に、小・中・高校で出前授業を実施する。同時に東京から海士町へバス（AMA ワゴン）を走らせ、地域づくり志向の人は途中でも乗車、地元住民・来島者相互に WIN-WIN 関係となれるような交流・学習・刺激遇いを行う。

2. サマースクール in 海士&新宿日本語学校留学生海士体験 2006

この交流事業の目的は、東京など都市部では体験しにくい、海士町に残る「日本固有の伝統文化、自然、人情など」を、「同校」を通じて「日本に興味を持つ外国人」に提供することであり、外国人と接する機会の少ない海士町の子供達や地元住民に「外国人と触れる機会」を提供することで、国際理解を深めることにある。それとともに、郷土の資源・魅力を、第 3 者（外国人）を通じて再発見し、誇りを持てるようにすること、独自の教授法で真摯な学校経営をしている「同校」と海士町の信頼関係を構築することで、首都圏ひいては世界へのチャンネルを創る。それと同時に、同校の教育精神や経営ノウハウなど「海士町の教育へ新しい風」を吹き込むこと等々にある。

サマースクール参加学生は、同校仏事務所にて募集し、来島前日に来日する。留学生については、同校の紹介と海士町の受け入れという形で実施している。

実施内容については、「同校」が実施する「日本の伝統文化・自然体験を含めた外国人短期留学プログラム」を、海士町が「島まるごと」で全面的にサポートすることと同時に国際交流も実施する。（詳細は、本編「行程表」「記録写真集」参照）

3. 俳句・短歌「隠岐吟行ツアー」

25 年程前、俳人加藤楸邨句碑を隠岐神社に建立、除幕式に金子兜太さん、辻井喬さん、石寒太さんをはじめ、俳壇・歌壇の著名人の来島、当時の役場職員から「隠岐吟行ツアー」企画の相談し、単なる歴史・自然、名所・旧跡巡り団体観光ツアーからの脱却を意図したが沙汰闇が続く。10 年程前、観光協会職員からこの組織のあり方の変革、隠岐・海士ならではの協会自身企画・文化交流マニア向ツアーへの想いから復活に挑戦する。先生方の大いなる賛同を得て、全国に俳句短歌を募集して、一冊の本にまとめ、全国に発信するとともに、選者の先生方が同行する「隠岐吟行ツアー」を実現する。その際、地元との交流ともてなしをプログラムに組み込み、本年度で第 8 回の開催を数えることとなる。

4. その他活動（海士町自主企画）

本年度の主要な活動は上記の 3 つであるが、これまでも「共生・対流事業」の社会実験に類する活動を海士町自主企画として様々行ってきた。その紹介報告を加えておく。

海士町の活動の興味を持たれた大学教授による出前講座

主に大学生・留学生のインターンシップ制度活用による職業体験

後鳥羽上皇を縁とする岡山県井原市との児童交流

8 回目となるアドベンチャーキャンプ in 海士&夏休み児童クラブ